

園芸の特徴を活かした療法とは何か - その考え方と実践の視点 -

藤岡真実¹・若野貴司²・嶺井 毅³・松居 勉⁴・浅野房世¹

¹東京農業大学農学部バイオセラピー学科 ²石川病院 ³いずみ病院 ⁴セコムフォート(株)

e-mail : m3fujiok@nodai.ac.jp

Analysis of Treatment Methods Using Characteristics of Horticulture - Thinking Process and Practical Viewpoint -

Mami FUJIOKA¹, Takashi WAKANO², Tsuyoshi MINEI³, Tsutomu MATSUI⁴ and Fusayo ASANO¹

¹ Dept. of Human and Animal-Plant Relationships, Tokyo University of Agriculture

² Ishikawa Hospital, ³ Izumi Hospital, ⁴ Secomfort, co.

Summary

In this study, the researchers explore, from the perspective of therapists, the importance in horticulture therapy of focusing on the 'time sense' and the 'relationship' between plants and human beings rather than productivity and/or the efficiency of plants. The 'time sense' is cultivated in a society where plants and human beings coexist, and the 'relationship' is built in such a society. One of the reasons why horticulture can be used for therapy is that it stimulates behaviors of human beings such as i) human creativity, ii) communication, iii) time recognition, iv) self-objectification, v) socialization (consideration towards others). The role of horticultural therapists is to support patients to experience the 'time sense' and the 'relationship' between patients themselves and plants through the process of horticulture, such as seeding, cultivating, harvesting, and processing. In this study, the researchers discuss the characteristics of horticulture for therapy and the role of horticultural therapists who are specialized in the field. This study indicates that horticultural therapy needs the perspective of how the 'time sense' and 'relationship' can contribute to the social development of patients.

Keywords : creativity, horticultural therapy, objectivity, time sense, unselfishness

園芸療法, 客観性, 利他性, 創造性, 時間性

はじめに

園芸の本質は、松尾(2005)が詳細に述べているが、人間が生きものに共感し、植物の生長に合わせて時間を綴っていく過程のなかで、植物の生長を予測し、必要な手助けを考え、工夫を凝らし、成功や失敗を学ぶとともに、その活動や成果を共有・共感することによって得られる情操(人間らしい喜び・感情)を体得するところにある。さらに松尾(2005)は、園芸の中に見出される人間らしさについて、人間は「獵る」行動と「育てる」行動という二つの創造的行動をもち、それが園芸のなかに投影されていると述べている。また園芸とは、動作体験と感覚体験の相互作用によって営まれる

一連の流れであり、これによって人間はより創造性が育まれる。

一方、脳生理学者であるエックルス(1990)、文化人類学者リーキー(1996)によると、人間は進化のプロセスの中で、言語・時間概念・意識(自己認識)・利他性を獲得し、人間としての創造性をより高次に発展させてきた。この四要素は、松尾(2005)の述べる「獵る」行動や「育てる」行動のなかに見出させるものである。なぜなら、ヒトが人間に進化するプロセスのほとんどは、ヒトと植物、あるいは、ヒトと動物という「ヒトと自然の関係」の中でしか構築されなかったはずだからである。

このようにヒトの進化と園芸は強い関係にありながらも、現代社会では、その関係性が述べられることはほとんどない。ヒトの進化に寄与した園芸であれば、

2009年10月26日受付。2010年2月26日受理。

園芸が人間の癒しや健康回復に寄与することは当然である。

園芸という行為を治療に用いていると自称する園芸療法実践者は多いが、園芸を上記の視点でみているものはほとんどいない。そこで本論文では、園芸にみる人間の特性を整理したうえで、ある統合失調症患者の事例を取り上げ、園芸療法の視点を明確にすることとした。

1. 園芸にみる人間の特性

1) 本能的存在から創造的存在へ

私たち人間は、独立栄養を営む植物とは異なり、限られた有機物に依存しているので、自然環境を積極的に利用するためには外界へ働きかけなければならない。それには、環境の状況を正確に受け止め、これに対してうまく適応し、対処していく能力が具わってなければならない。これは、ヒトから人間に進化する過程ではぐくまれてきた人間らしさは、園芸の特徴である創造的行為のなかに包括されていることを意味する。

なぜなら、園芸は人間特有の行為であるからである。他の動物は植物を育て、情緒的安寧をはかることはしない。園芸とは、五感を使ってのかわり方(感覚体験)と体や頭を実際に働かせての植物とのかわり方(動作体験)を植物の生長に合わせながら綴っていく過程であり、そこに時間性が入っていることが大切である(松尾, 2005)。

時実(1976)によると、私たち人間には、大脳辺縁系(旧皮質と古皮質)に生まれながらに具わっている本能的な感情(情動)と、大脳皮質(新皮質)で作られ出される高等な感情(情操)がある。この二つの皮質から生じる二つの感情によって、葛藤や不安が生じる。それを乗り越えるからこそ、人間らしい喜びが得られ、そこに幸福を見出し、そのために精神的鍛錬を行う。この一連の精神活動を創造性(creativity)という。

このような精神的鍛錬を行える創造性があるからこ

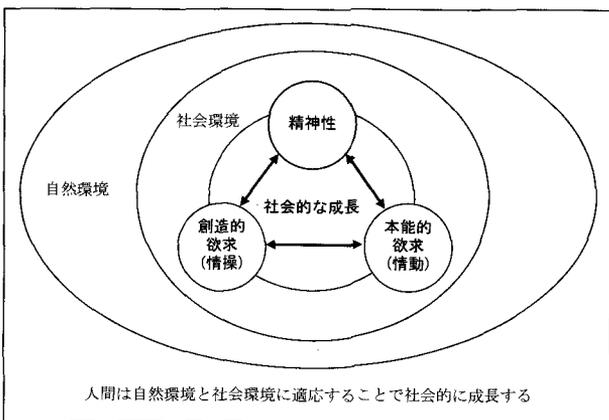


Fig. 1. Human social growth and creativity.
第1図. 人間の社会的な成長。

そ、創造的な行動が可能なのである。情操は前頭連合野の発達する4歳頃から創造的な欲求が賦活されることで体得されるが、未来に目標を設定し、集団での価値を追求し、その実現をはかろうと意欲的に行動することで体得できる。ここでは、この意欲を抑制・推進しながら、社会の変化に適応する創造的な行動を行う精神活動を、人間の「精神性」とよぶことにする(第1図)。

園芸にみるこのような精神性が、松尾(2005)の述べる人間らしさの発達を可能にするのである。

2) コミュニケーション(意思疎通)

人間は、言語によってイメージし、考えをまとめている(丸山, 2008)。音や文字として表す以前に、人間は内なる自分への問いかけも、言語を介在して行っている。ヒトが人としてあり始めたころ、目の前の植物に「問いかけ」、植物が「答えてくれる」ように感じたのかもしれない。これは、心の中でくり広げられる「内なる会話」である。この内なる会話を他者と共有したいという情動が、会話のきっかけをつくり、コミュニケーションを促していったと考えられる。

しかもこれは、自己と他者という二者間の関係にとどまらない。信仰や宗教に視点を移してみると、植物は生きるための食物以上に重要な意味をもっていた。ヒトと神のコミュニケーション、すなわち「祈り」のなかにも、神と自己を繋ぐコミュニケーション媒体(信仰の対象物として、また供え物)(白幡, 2007)として、ヒトは植物を採取し、育てた。目に見えぬものを想像し、その祈りのために園芸があったに違いない。

つまり、言語を交わす会話だけでコミュニケーションは成立しない。人間は、コミュニケーションの手段として、ことばを用いようとする本能をもっているが、これは、話し手が意図した解釈にたどりつくべく、過去の記憶から話し相手に関する知識なども引き出して、総合的に相手が何を伝えたいのかを推し量るためである(正高, 2005)。

このことは、後に述べる社会性(利他性)につながるが、霊長類研究の第一人者である正高(2005)によれば、「時間の隔たりは、つながるという感性の成立を阻害する。」と述べたうえで、「人間のコミュニケーションには、他者と“つながる”という感性が必要であり、そこに、時間性が伴う。」

3) 時間の概念

季節がめぐり、暖かくなり、同じ場所に同じ植物が育ち、それは食べられる食物であると認識したとき、時間の概念が生まれたことは想像に難くない。同様に、日の長さ、月の満ち欠け、果樹の実り、落葉からも時間を認識したであろう。

人間がこのように時の流れを認識できるのは、前頭連合野の働きによるものである。前頭連合野をもたない動物、または人間でも前頭連合野が未発達な2, 3歳

児には、今の瞬間しか存在しえず、未来に対する不安や心配もないという(時実, 1968)。言い換えると、前頭連合野をもつ人間だからこそ、成長するにつれて時間を感じ、明日や未来に不安や心配を伴うようになる。

たとえば、植物の成長を予測し、計画的に行動できる反面、不安を抱き心配しながら、期待して待ちわびる。その不安や心配を乗り越えるからこそ、人間らしい情操の心、つまり、人間らしい喜びや悲しみが創造される。そしてこれらの情操の感情は、他者と共有することでさらなる喜びとなる。この情操が、これまで受け継がれている、美感、畏怖感、敬虔の念、などの感情を生成する。

そして、このような人間らしい感情(情操)をもつもの同士に、“つながる”感性が芽生えたからこそ、ネアンデルタール人のみでなく、現代人にもみられるような、感情を表す手段として、花を用いる創造的な行動につながっていったといえよう。

4) 自己認識

上述した時間の認識ができるということは、事象の変化が客観化できるということである。ネアンデルタール人が、埋葬時に花をたむけて(エックルス, 1990)、死者を弔うという儀式は、自己と他者という自己認識が発達していなければ、成立しない創造的な行動である。

人間は生れ落ちると同時に物理的存在としての自己を認識し、意識と連動させようとする。たとえば、乳児が自分の握りこぶしを不思議そうに眺めたりするが、これも、新生児における身体感覚と意識の統合と発達の一つである。ヒトは自己を認識するからこそ、他者とともに集団生活することができるのである。

このように、人間は成長するにつれて、過去よりも現在、現在よりも未来、と自己の創造的な行動を時間経過のなかで客観化できる。本能的に植物とかかわり、感覚刺激を受け、事象を客観的に観察する力を得、時間経過を認識し、自己自身の客観化が可能であるからこそ、創造的に植物を育てる行動が可能になったといえよう。

上述した“つながる”感性は、種属保存に基づく本能的な性欲(情動)のみならず、精神的なつながりに喜びを感じる情操をはぐくんだ。これにより、人間は目に見えるものだけでなく、概念を共有できる客観性ももちえたといえる。

5) 社会性(他者への配慮)

人間の本能的な欲求のなかには、食欲・性欲・集団欲がある(時実, 1976)とされるが、この集団欲を充足させるためには、仲間をもち、社会生活を営む必要がある。また、人間は生理的早産であるため、教育されなければならない動物である(時実, 1976)。自然環境のみならず、社会における集団は人間性の発達に必要な環境なのである。

一方、多くの哺乳類は自分の「子どもをそだてる」、つまり「子そだて」をするが、人間は自分の子どもだけでなく、あらゆる生きものを対象としてその世話をする。言い換えれば、それらを保護し、成長の手助けをする。植物の栽培、動物の飼育のみならず、多様な生きものを育てる。

このような、意図をもって計画され、意図した活動が、他の人(々)の利益に関して実施される他者への配慮は、利他性といわれる。道徳的行為である他者への配慮が最初に実行されたのは、食物を分け合い、埋葬習慣が始まった時代だと考えられる。自力では食べ物を取得することが出来ないほどの障害がありながら、40歳まで生きていたネアンデルタール人の人骨や埋葬時の献花の痕跡から、他者への配慮が推測される(エックルス, 1990)。

このように、ヒトの本能的に具わっている利他性は、現代社会においては、社会性と言い換えられよう。なぜなら私たちは、衣食住を守る自然環境のみならず、社会集団を維持し、それを守り育てる必要があるためである。社会を善くするためには、人間関係を築きながら、社会をはぐくむためには、他者を気遣い、力を合わせて社会を善くしようという社会性がなければ、社会の秩序は保たれない。

松尾(2005)のいう人間の「育てる行動」は、ヒトの本能的な集団欲を充足させるのみならず、人間の社会性(他者への配慮)をはぐくみ発展させる人間の創造的な行動といえよう。

6) 人間らしさの創造

このように、人間の進化は、「人間と植物の関係」の進化であったとも言い換えられる。育てる(農耕や園芸)行為が、進化に寄与し、人間らしさをはぐくみ、情操を育て、文明や文化に昇華していったのであろう。

人間はさまざまな自然環境に適応しながら、創造的存在として成長し、社会をはぐくんできた。しかし、人間は社会的存在であるため、社会の秩序を守りながら自己を確立し、他者との関係性をはぐくむ必要がある。つまり、本能的な欲求と創造的な欲求のバランスを保つためには、上述した人間の「精神性」が必要なのである。

松尾(2005)のいう人間らしさの養成と発達に園芸が寄与できるのは、人間が自然環境の一部であると認識し、ヒトの本能に基づく社会性(他者への配慮)と、自らの創造的な行動を客観化できる時間性が伴い、社会的存在として成長していく一連のプロセスのなかで、精神性をはぐくむことができるためである。

以上のことから、園芸は、本能的な欲求である「社会性(他者への配慮)」を賦活する“つながる”という感性をはぐくみ、前頭連合野の発達による「時間性(時の認識)」と「自己の客観化」によって行える人間の創造的な行動をはぐくむ行為であるといえる。だからこ

そ、人間として生きる意欲を喪失し、集団欲が減退し、社会的存在としての時間が停止し、自閉的にならざるをえない対象者に対して園芸療法が有効であると考えられる。

2. 園芸の特徴からみた園芸療法と事例

そこで、Mineiら(2008)が関わった症例をとりあげ、これらの視点で考察してみたい。

1) 園芸療法の一事例(N氏の場合)

症例N氏は当時74歳の統合失調症の男性である。10代の頃から幻聴を主とする精神症状を呈していたが、日常生活に強く影響を及ぼすことはなく、本人なりに暮らしていた。60代になり、幻聴や息子たちに殺されるとの妄想、不安、不眠、徘徊等の症状が出現し、精神科病院へ2度の入退院歴がある。その後はデイケアに通所するが、他者への関わりもほとんどない。カレンダーの色塗りをきっかけに、自ら「ぬり絵」を行うようになる。ここにいたるまで3年が経過。几帳面な性格から、花や幾何学模様を綺麗に塗りこむ。クレパス箱にある全色を使う傾向にあり、「手の絵」は関節ごとに色を塗り替え、「動物の絵」も、胴体に自ら境界を作り、色を塗り替える。

共同作業においては他参加者を待つことが出来ず、勝手に作業を進め、ますます孤立していった。

この状況を打開すべく、「これまでの作品を整理してまとめよう」と声をかけていたところ、ある日、本人の中で区切りがついたらしく、次は園芸に参加したいと意思表示するようになった。過去に農業の経験があるため、苗植えや除草を熱心に行い、しめ縄作りでは、手足を器用に使って一人黙々と作業を行った。しかし、これらの活動においても孤立する傾向にあった。

このように、他者との交流がほとんど無かったN氏ではあったが、スタッフへ「ビワのお茶が飲みたい。」と発言するようになった。後日スタッフが用意したビワ茶を前に、「これは万病にきく。」と話し出し、それを聞いていた通所者らとの自然な会話が広がり始めた。また、花壇のナススタチウムを指差し、「これを酒に漬けて飲むと神経痛にいいよ。」とアドバイスするなど発言が増えていった。

共同作業では、ゲットウの葉を三つ編みにする作業を実施したところ、N氏は持ち手になった。この作業の間の会話はほとんどみられなかったが、編み手である他者が引く力加減に、十分に反応した。また、編んだゲットウを作品へと仕上げる際に、小声ながらも「ここを通して。」「ここを押さえて。」と話す場面がみられた。

このようにN氏には、徐々にではあるがコミュニケーションに変化がみられるようになった。また作業においても、他者の力加減を考えながら“持ち手”を務め

るという、他人に対する心遣いをみせ、他者とのかわりの中で、自己の客観化が促された様子がみえた。

N氏は、毎日来所すると時間を見つけて散水を行う。前日の降雨も気にせず散水する姿に、スタッフが声をかけると、「水やりをしている。」と笑顔で返答する。しばし花壇を眺めた後、時に雑草を数本抜いて帰っていく。

園芸がN氏にとって生活の一部となった。通所者らとの会話は少ないものの、彼らと自然に関わることもでき、他者と自己の距離感も安定してきた。降雨後の水やりという行為には多少の固着がみられるものの、植物を育てることで、季節のめぐりを体感し、利他性も芽生え、作業の工夫も確認できるようになった。

現在のN氏は、人間としての創造性を自ら社会とかかわるなかではぐくみ、他者との関係性をはぐくむ自己をもつまでにはまだいたっていない。長い月日を要するであろうが、確かに生成されていく時間のなかで、N氏の創造性を守り育てる必要がある。

2) N氏の事例にみる園芸の特徴

(1) 時間性の把握による自己の客観化

園芸療法での介入以前に、N氏には「ぬり絵」での介入を行っていたが、その当時は本人にとって自ら取り組める唯一の活動であった。しかし、時間の経過と共に以下のような常同行動となるに至った。時間や場所を選ばず、個別で行える活動は、N氏の内的な時間を生成するにとどまり、塗りこみに集中することで他者との交流をせずすむという悪循環に陥った。デイケアという社会集団の場に集う機会を提供しても、それ以上の意味をなさなかった。

外界からの刺激統制が必要で、内的な時間を営むための場が必要である場合は別として、他者とのつながり、社会とのつながりへと誘うためには、個別で完結してしまう作業から集団活動への転換が必要である。

N氏の治療場面の転換は、i) N氏自身が内的な営みを継続することで心の安定をはかっていることにスタッフが気づいていたこと、ii) N氏の感情を汲み取り、自らが「区切り」をつける時間を用意したこと、iii) N氏に共感した療法士との間に良好な関係性が構築されていたこと、iv) N氏の意思決定のタイミングを逃さなかったこと、v) 園芸が準備されていたこと、などによって可能になったとみられる。N氏が、これまで描いた絵を整理するという、時間性の把握と自己の客観化を行うことができたことで、療法士は次の目標である集団活動への転換をめざして、園芸療法に移行したのである。

(2) 社会性の向上

上述したように、時間の認識と自己の客観化は人間性が発達することで可能となる創造行為である。苗植えや除草を熱心に行い、しめ縄を器用に作る姿などから、N氏にとって過去の農業経験は、持続的、価値的

な情操がはぐくまれた創造的な時間であったと推察される。

「ピワのお茶が飲みたい」、「これは万能にきく」などの言葉は、自らの経験や知識の習得だけでなく、共に汗を流し、喜びや苦勞を体験した農業仲間との交流の様子が窺える。

ゲットウの葉を三つ編みにする共同作業では、上述したように、他者の力加減を考えながら“持ち手”を務め、他者への気遣いが確かな行為として表れた。N氏の中で、自らがコントロール出来ないことを他者に任せるといふ、かかわり合いが行為として表れ、そこに伴う情操に対して陽性の感情を抱いたといえよう。

N氏から自然と表出された言葉には、創造的な行為が伴っている。時間の認識と自己の客観化には、療法士の支援がまだまだ必要である。療法士は、N氏の心で創造される時間を遮断せず、他者の共感を得られるように守り育てることが肝要である。これによって始めてN氏には、他者と共有された確かな時間が生成されよう。

(3) 「時間性」・「社会性」・「客観性」

N氏のように、たとえ特定のこだわりや固着がみられる患者であっても、治療手段として用いる植物が生きていて「変化する対象」である以上、治療環境は流動的なものとなる。

また、長期にわたって体得された生活習慣や感情の鈍麻、集団欲の減退を改善するためには、長期間の治療を要する。

これら二つの点からも、生活の一部として植物とのかかわりが長期にわたり継続されることは、現実の時間経過を客観化でき、かつ、他者と共感できる媒体を生成することができるので、精神療法の一つとして有用となる。

園芸療法での適応がみられる対象者の多くは、N氏のように自閉的な本能的行動に没頭し、他者の共感が得られにくく、社会的存在としての「生きにくさ」を

抱えている。自分の行為を客観視することが困難であり、他者と共有できる媒体を新たに獲得することも難しい。これを改善するためには、「社会性(他者への配慮)」、「時間性(時の認識)」、「自己の客観化」によって行える創造的な行動を包括する園芸を用いた療法、すなわち園芸療法が有用となる。

この意味から、園芸療法における園芸には i) 継続して植物とかかわり、ii) 情緒的交流を行うなかで情操をはぐくみ、iii) 他者と共感し、iv) 植物を育てる時間を待ちわびる、という一連のプロセスが内包されているからこそ、他の療法にない「時間性」とそこで培われる「関係性」が治療として寄与する。言い換えると、仲間と集い、人間らしい喜びを共有できる空間と「時間性」をはぐくむため、植物を育てるともいえる。

3) 園芸療法士に必要な倫理観

しかし、園芸が分断された活動・作業となり、機械的に行われ、マニュアル化した場合、知識と技術で園芸を行うこととなり、そこには、相手への気遣いよりも、人間の操作性が勝ることとなる。自分の思い通りにしたいという、「生きもの」を「モノ」として扱い、時間と手間を簡略化する人間の創造的な行為では、対象者の抱える社会的存在としての生きにくさは改善されない。

さらに、療法士が園芸の特徴を理解せず、単に花を植え替え、水やりをすることを「治療」という名目で用いた場合、療法士の倫理観は欠如しており、自己の客観化が困難な対象者の精神性ははぐくまれるどころか、社会性の低下を助長することにもなりかねない。

筆者らは、N氏の事例を通して、i) 園芸は、ヒトの本能である社会性(他者への配慮)を賦活する情操を養い、ii) 園芸を通じて、相手を気遣い、想像し、意志をはたらかせる行為にうつせるように対象者を導くこと、iii) これら一連の社会的存在としての創造的な行動を対象者自らが出来るか否かを、植物を育てるプロセスのなかで、見守り、育てる視点が園芸療法士には求

Table 1. Therapeutic effects and characteristics of "coloring" and "horticulture" (Case N).

第1表. N氏の「ぬり絵」と「園芸」にみる療法的効果と活動特性.

	活動中のN氏の様子	他者との交流	社会性	活動の連続性
ぬり絵	【個別作業】 花や幾何学模様を几帳面に綺麗に塗りこむ。クレパス箱にある全色を使う傾向にある。「手の絵」は関節ごとに色を塗り替え、「動物の絵」も、胴体に自ら境界を作り、色を塗り替える。	【特に必要としない】 他参加者を待つことが出来ず勝手に作業を進める。	【孤立】 独特な「ぬりこみ」は他者の共感が得られない。	【断片的】 自己完結でき、自らの作業に没頭できる。時間と場所を選ばない。
園芸	【個別作業】 過去に経験のある農作業(苗植えや除草)、しめ縄作りなども手足を器用に使って一人黙々と作業を行う。「ピワ茶が飲みたい」とスタッフへの意思表示をし、出されたピワ茶を前に、「これは万病にきく。」と話し出し、それを聞いていた通所者らとの自然な会話へと発展。花壇のナスタチウムを指差し、「これを酒に漬けて飲むと神経痛にいいよ。」とアドバイスするなど発言が増える。	【特に必要としない〜必要】 ・個別でできる作業に会話は必要ないが、プログラムで使用した馴染みのある材料・道具などが参加者同士の共通の話題となりうる。	【やや向上】 N氏の知識が一般的な健康の話題など、他者と共感しやすい話題であり、他者の共感が得られる。	【連続的】 ・過去の農業経験や社会生活と繋がる。 ・他者からの共感が得られ、繋がりが生まれる。 ・季節や天候、植物の生長に合わせる必要がある。 ・生命の多様性、社会の多様性への対応へ繋がる。 ・変化に対する耐性が養われる。
	【共同作業】 ゲットウの葉を三つ編みにする作業で持ち手になり、編み手である他者が引く力加減に、十分に反応する。また、編んだゲットウを作品へと仕上げる際に、小声ながらも「ここを通して」、「ここを押さえて」と話す場面がみられる。	【必要】 出来上がりの作品イメージを共有でき、作業目的を共有できる。達成感が共有でき、連帯感が生まれる。	【向上】 良い作品を仕上げたいという感情の共有、自然と他者への気遣いが生まれる。	

められることを示した。

言い換えると、園芸療法には、育成、収穫、加工、播種など一連の「育てる」行為の流れを、自己と他者(対象植物)という関係を基本として、i)時間性を感じ、ii)予測し、iii)計画し、iv)失敗などから学び、v)工夫し、vi)それらを利他性や関係性の改善につなげていく治療構造をもっているという視点が重要なのである。

おわりに

私たち人間は、前頭連合野があるために「心配する動物」だとされている(時実, 1968)。期待と不安のなか、植物の成長する姿に思いを馳せ、「待ちわびる」という行為が伴うからこそ、園芸による人間らしい喜びが生まれる。植物を植える、花を摘む、刈り取る、などの作業(行為)は、その部分だけを取り出すと、それは園芸活動の一断面を捉えているにすぎず、活動の場面ごとに時間が分断されることを意味する。このような活動では、たとえ「生きもの」を扱っていたとしても、生物学的時間は介在せず、「生きもの」は「モノ化」しているといえよう。

園芸療法における園芸は、人間の本能的な欲求を満たす情動と創造的な欲求を満たす情操を調和させる一連のプロセス、すなわち、精神的鍛錬に必要な人間の精神性を養うことを治療に用いる媒体と考えられる。

特に、統合失調症患者のように、言語によるコミュニケーションが困難な場合には、情動と情操の調和がどのような行動に表れるかを見極める必要がある。そのためには、注意深い観察によって、細かな変化を捉える観察者側の視点が重要となる。そして、その観察者側の視点を中立に保つために、自然環境のもつ「時間軸」を評価軸の一つとして加え、継続して患者の変化を観察することが、園芸療法における重要な視点といえる。

この視点に着目し、患者の小さな内面的変化をも評価できる方法を探り、それが園芸療法の効果の評価として適切であるかという検証も含め、園芸療法の研究と実践を進めていくべきである。

摘 要

園芸が治療に寄与できるのは、i)人間の創造性、ii)コミュニケーション(意思疎通)、iii)時間の認識、iv)自己の客観化、v)社会性(他者への配慮)、これらの人

間の創造的な行動を包括しているからである。

したがって、園芸の特徴を活かした療法、すなわち園芸療法では、植物の生産性・効率性よりも、植物と共に人間が社会のなかで存在する「時間性」と、そのなかで展開する「関係性」に焦点を充てることが重要である。

園芸療法士の役割は、園芸にみる、播種、育成、収穫、加工、など、一連の「育てる」行為の流れを用いながら、患者と植物の関係を基本とし、患者自身が時間の流れと自己の行為を客観化できる、すなわち、時間性と関係性をとを体得できるように支援することである。

以上のように、園芸の特徴を活かした園芸療法には、園芸のもつ「時間性」とそれによって培われる「関係性」が患者の社会性の向上にどのように寄与するかを捉える視点が必要である。

引用文献

- エックルス, J・C. (伊藤正男訳). 1990. 脳の進化. pp.71-74, 101-123, 146-149, 237-248. 東京大学出版会. 東京.
- 正高信男. 2005. 考えないヒト-ケータイ依存で退化した日本人-. pp.18-23, 32-47. 中公新書. 東京.
- 松尾英輔. 1998. 園芸療法を探る-癒しと人間らしさを求めて-. pp.16-22. グリーン情報. 名古屋.
- 松尾英輔. 2005. 園芸にみる人間らしさとは何か-癒しと喜び-. 人間・植物関係学会雑誌4(1・2): 3-8.
- 丸山圭三郎. 2008. 言葉とは何か. pp.73-81. 筑摩書房. 東京.
- Minei, T., T. Kiyuna, M. Tanaka and Y. Takaesu. 2008. Horticultural therapy for the aged with chronic schizophrenia. *Acta Horticulturae* 790:63-66.
- リーキー, R. (馬場悠男訳). 1996. ヒトはいつから人間になったか. pp.7-104, 167-226. 草思社. 東京.
- 白幡洋三郎. 2007. 花を觀賞する, 花を育てる: 花を愛でる美意識の歴史. 日高敏隆・白幡洋三郎(編). 人はなぜ花を愛でるのか. pp.228-262. 八坂書房. 東京.
- 時実利彦. 1968. 脳と人間. pp.109-126. 雷鳥社. 東京.
- 時実利彦(編). 1976. 教育学叢書第20巻. 情操・意志・創造性の教育. pp.11-19, 83-86, 97-119, 131-145, 154-162, 162-170, 184-185. 東京. 第一法規.